

貝原好古『和爾雅』草木門における漢名と和名の対応について
 — 貝原益軒からの影響を中心に —

鬼頭祐太

キーワード：貝原好古、『和爾雅』、本草学、『新刊多識編』、元禄期の辞書

1. はじめに

本稿では貝原好古（一六六四～一七〇〇）¹が編んだ辞書『和爾雅』がどのような資料の影響を受け、成立したのかを検討する。

『和爾雅』は元禄七年（一六九四）に刊行された意義分類体辞書である。漢字で書かれた見出し語が意味によって天文門から言語門までの二四の門に分けて配置されている。凡例には「元禄戊辰（鬼頭注・元禄元年）魁秋日」とあるため、元禄元年までの成立と考えられる。岩波書店 編（一九七二）によれば、元禄七年に刊行された後も正徳六年（一七一六）、享保三年（一七二八）、享保六年（一七二二）に刊行されている。

『和爾雅』の編纂方法やその過程については未だ明らかでない。

蜂谷（二〇〇七）、米田（二〇一四）などいくつかの研究事典における『和爾雅』の項目では、中国の辞書『爾雅』に倣った（規範とした）とする記述が見られるが、『爾雅』との関係について具体的な影響関係を指摘したものはない。また、これまで稿者が調査したところでも『和爾雅』の意義分類の仕方や順序は『爾雅』と類似しておらず、出典として『爾雅』を挙げる見出し語も極めて少ない。稿者は『爾雅』との関係についての見通しを立てられておらず、『和爾雅』の成立については『爾雅』以外の書物や人物といった観点からの影響関係の考察を行う必要がある。

一方、『和爾雅』の著者の好古に彼の叔父である貝原益軒²（一

一 井上（一九八三a）によれば、筑前国（現、福岡県）出身。好古は名、字は敏夫、通称は市之進、号は耻軒。貝原益軒の甥（益軒の兄の子）だという。本稿では「（貝原）好古」と称す。

二 井上（一九八三b）によれば、名は篤信、字は子誠、通称は久兵衛、号は初め柔斎、後に損軒、晩年に益軒としたという。井原

六三〇（一七一四）からの影響があったことが近世期には伴蒿蹊『近世畸人伝』で、明治期には『益軒全集』で指摘されている^三。

ただし、二書の記述では具体的にどのような影響があったのか、類似しているのかは不明であった。そのため、益軒の著作と記述を比較し、本当に類似する点が見られるかは検討する必要がある。

益軒から好古への影響については近年、笹原（二〇〇七）が益軒『続和漢名数』における国字に関する記述と『和爾雅』の記述に共通点があることを、野口（二〇二〇）が益軒『和漢名数』、『増補和漢名数』^四における名数についての記述と『和爾雅』の記述に共通点があることを指摘した。確認できている『和爾雅』についての先行研究はこの二つのみである。両研究とも『和爾雅』の成立に益軒からの影響があったことを示唆するものであるが、『和爾雅』の成立背景を明らかにするには、さらに多くの文献との対照や新たな観点からの考察が必要である。

そこで本稿は『和爾雅』の漢名と和名の調査を行い、どのような形にして編纂されたかについてその一端を把握することを目的とす

る。漢名と和名の記述に益軒からの影響があるとすれば、今後の検討の際に考慮に入れる必要がある。なお、今回は漢名と和名の対応のみに注目し、見出し語がどのような基準によって取られたか、注文ではどのような書物を出典としたかなどは検討しない。

『和爾雅』の各項目を見ると、漢字の見出し語、カタカナの振り仮名、訓点付き漢文の注文で構成されている。ただし、注文は欠くことがある。項目「桔梗」を例として示す。

桔梗
キキヤウ
キチカウ

一名梗草^五

（早稲田大学蔵本『和爾雅』第五冊九コマ）
この例では見出し語が「桔梗」、振り仮名が「キキヤウ、キチカウ」、注文が「一名梗草」である。比較対象とした文献によって漢名と和名の示し方や位置が異なるが、『和爾雅』については見出し語を漢名、振り仮名を和名として他書と比較を行う。「漢名」と「和名」の語を用いるのは益軒の書物「本草綱目品目」について研究した磯野（二〇〇八）に倣ったものである。「本草綱

（一九五八）によれば、貝原益軒が「益軒」と号したのは彼が七八歳ごろからで、それ以前には「損軒」と号していたという。『和爾雅』が編まれた時期も「損軒」と号していたが、本稿では「（貝原）益軒」と称す。

三 伴 著、宗政 校注（一九七二）、益軒会 編（一九九一、後一九七三）を参照。

四 『和漢名数』は延宝六年（一六七八）、『増補和漢名数』は元禄五年（一六九二）、『続和漢名数』は元禄八年（一六九五）の刊行。
五 『和爾雅』の注文は本来割注であるが、本稿では割注の形では示さない。『和爾雅』以外の資料に関しても割注などの双行のものについては原典の形をそのままに引用せず、適宜改めた箇所がある。

目品目」は三章以降で『和爾雅』の比較対象としている。「和名」という呼称は訓読みを意味するものではなく、音読みに由来するもの（「桔梗」に対する「キチカウ」、「菊」に対する「キク」など）も含む。本稿では早稲田大学蔵『和爾雅』を用いた。

二. 今回の検討箇所及び、検討資料と使用理由

二. 一 「和爾雅凡例」の記述と好古への貝原益軒からの影響

調査にあたり、『和爾雅』と比較する資料の選定が問題となる。『和爾雅』の編纂においてどのような書物が参考になったのか。そこで『和爾雅』編纂の際に引用し、参考にしたとされる書物の名が示される「和爾雅凡例」第十四条を確認する。

引き用ゐる所の書、華書は詩経、爾雅、五経註疏、左伝、三史、釈名、説文、玉篇、小補韻会、字彙、本草綱目及び三才図絵、農政全書等を以て主と為す。其の他、書疏、史録、稗編、小説、字書、雜記、亦た明証有れば、則ち摺摭して以て之を補ふ。倭書は日本書紀、万葉集、倭名抄を以て本と為す。

林氏が多識編、中村氏が訓蒙図彙等を以て之に継ぐ。且つ俗間玩ぶ所の数種の雑字書の如きも、亦た之を檢閲し、間取るべき者有れば、則ち之を揀び用ゐる。濫りに取るに非ざるなり。六。（「和爾雅凡例」第十四条）

（早稲田大学蔵本『和爾雅』第一冊一四コマ）

第十四条に見える『詩経』や『爾雅』をはじめとする中国の文献、『日本書紀』や『万葉集』をはじめとする日本の文献などは『和爾雅』編纂に大きく影響した可能性があるが、影響があつたとみられる益軒の名や彼の著作の名は挙がらない。しかし、先行研究の野口（二〇二〇）では「和爾雅凡例」に書名が見えない益軒『和漢名数』と『和爾雅』の記述の類似が指摘される。『和漢名数』は「和爾雅凡例」の書かれた元禄元年までに刊行されている。野口の指摘は「和爾雅凡例」に書名が明示されない益軒の書物からの影響関係の有無を検討する意義があることを示唆する。

「和爾雅凡例」に書名が明示される書物と『和爾雅』以前に成立した益軒の書物を比較、検討したものととしては磯野（二〇〇八）がある。磯野は寛文十二年（一六七三）本『本草綱目』^七に二箇所存在する漢名と和名の対応を林羅山『新刊多識編』と比較した。

六 訓点、送り仮名付きの漢文を私に書き下し、明示された書名に傍線を付した。

七 寛文十二年本『本草綱目』は貝原益軒を附訓者とみて「貝原本」と称することがある。しかし、渡邊（一九五三）では益軒を附訓者とすることに疑いを示している。さらに磯野（二〇〇八）では益軒が附訓者であることを否定した。稿者も寛文十二年本『本草綱目』の附訓者を益軒とは見ていない。したがって以下でも「貝原本」と呼称しない。

漢名と和名の対応を示した二箇所は渡邊（一九五三）によると、一つは各巻末に載る作者不詳の「和漢名對訳表」、もう一つが貝原益軒「本草綱目品目」である。磯野はこの二箇所における漢名と和名の対応について次の事を明らかにした。

- ①各巻末の「和漢名對訳表」で示される漢名と和名の対応は羅山『新刊多識編』と全く同じである。
- ②一方で益軒「本草綱目品目」は後に益軒が著した『大和本草』に見える漢名と和名の対応と同じ場合が大半である。
- ③各巻末の「和漢名對訳表」で示される漢名と和名の対応は「本草綱目品目」に見えるものと相違するものが多い。

この指摘から『本草綱目』では同じ版であっても示される箇所によって漢名と和名の対応は同じではないことが分かる。そのため、「和爾雅凡例」に「引き用ゐる所の書」として『本草綱目』の名が挙げられているが、「和爾雅凡例」の記述だけでは『本草綱目』を利用したことが知られるだけである。「本草綱目品目」を利用したのか、『新刊多識編』と全く同じという各巻末の「和漢名對訳表」を利用したのか、そもそも諸本の内どの版を利用したかも不明である。さらに「和爾雅凡例」には益軒「本草綱目品目」を使った

と明示されておらず、『和爾雅』の本草学関係の記述に益軒が影響を与えたかは検証の必要がある。しかし、『新刊多識編』と「本草綱目品目」での漢名と和名の対応に相違があるという指摘から、この二書を用いることで『和爾雅』で漢名に付された和名がどちらの書に近いかという比較検討ができる。

そこで、『和爾雅』と比較する書物を「本草綱目品目」と『新刊多識編』の二書とする。寛文十二年本『本草綱目』各巻末の「和漢名對訳表」は『新刊多識編』と示される漢名と和名の対応が同じであるため、今回は用いない。次に比較対象の概要を述べる。

二・二 『新刊多識編』

中田・小林（一九七七b）によれば林羅山^八（一五八三〜一六五七）が編んだ『多識編』は、李時珍『本草綱目』を基とした書物であり、『本草綱目』に載る語を取り上げ、各語について漢字の異表記を示すほか、それぞれに羅山が和名を付したものである。『新刊多識編』は『多識編』のいくつかある写本と版本の一つで、寛永八年（一六三二）に刊行されており、整版本としては最も刊行が早い。その他、『改正増補多識編』と称される整版本も見られるが、これは増補者、刊年共に不詳であるという。『新刊多識編』は成立年が明らかになっている上、作者が林羅山であることが確

八 堀（一九八四）によれば通称又三郎、名は道春など、字は子信、号は羅山、浮山など。京都生まれ。

実である。「林氏が多識編」を用いたとする「和爾雅凡例」の記述に合うため、『新刊多識編』を用いる。本稿では見出し語を漢名、その下の真仮名を和名として比較を行う。例として項目「桔梗」を示す。

桔梗 阿利乃比布岐〔異名〕白藥〔別録〕（以下略）

（中田・小林（一九七七a）二三八ページ）

この例では見出し語の「桔梗」を漢名、見出し語の下にある「阿利乃比布岐」を和名とみなす。なお、「異名」に記される漢名は本稿での検討対象としない。『新刊多識編』では注文中で和名を示すが、『和爾雅』のように振り仮名の形で示すことはない。そのため、現れる場所は異なるが、『新刊多識編』の注に現れるものと『和爾雅』の振り仮名に現れるものを対照する。各見出し語の出典として注文中で『多識編』が明示された箇所はない。しかし、「和爾雅凡例」に記載することからは何らかの形で影響を受けたと考えられる。注文以外で典拠として依拠したとすれば、見出し語の選定、また見出し語の漢名と和名の対応は検討対象の候補となりうるだろう。磯野（二〇〇八）で『新刊多識編』と「本草綱目品目」二書における漢名と和名の対応の様相が明らかになった。このことを踏まえ、本稿ではまず漢名と和名の対応に着目し、漢名と和名

の観点から影響がどの程度認められるか検討する。本稿では中田・小林（一九七七a）所収の『新刊多識編』の影印を用いる。

二・三 「本草綱目品目」

『新刊多識編』と「本草綱目品目」での漢名と和名の対応を比較した磯野（二〇〇八）によれば、「本草綱目品目」は寛文十二年本『本草綱目』冒頭に付された目次に相当する部分であるという。「本草綱目品目」では『本草綱目』の各見出し語を順に掲げ、それぞれに振り仮名を付している。見出し語を漢名、振り仮名を和名として扱う。例として項目「桔梗」を示す。

桔梗 キチカウ

（京都大学図書館富士川文庫蔵本三八コマ）

この例では「桔梗」を漢名とみなし、振り仮名「キチカウ」を和名とみなす。この例のように「本草綱目品目」は『多識編』同様『本草綱目』に記載の漢名に和名を対応させたものである。磯野が『新刊多識編』と「本草綱目品目」の漢名と和名の対応を比較した結果、「本草綱目品目」の和名は『新刊多識編』の和名と多くが一致しないことを指摘した^九。この指摘から、『新刊多識編』と比較することで益軒「本草綱目品目」に載る漢名と和名の対応が

九 ただし、実例として掲げているものが植物名に偏っているため、その他の語彙については別途確認の必要がある。

『和爾雅』において比較的多く見られるか検討できる。本稿では京都大学図書館富士川文庫所蔵寛文十二年本『本草綱目』の「本草綱目品目」を用いた。

二・四 『和爾雅』草木門を検討対象とする理由

『和爾雅』に二十四ある門の内、草木門を対象とした理由を述べる。比較対象とした『新刊多識編』、「本草綱目品目」の両書ともに『本草綱目』を基としており、収載される語は動植物に関するものが主である。そのため、検討対象とする箇所は同じく動植物に関わる語が収められる門でなければならない。『和爾雅』には動物に関する門が畜獣門から蟲介門までの四門、植物名に関する門が米穀門から草木門までの四門存在する。よって動植物名に関する語を収めた門は合わせて八門存在する。そのうち、最も漢名の数が多いのが草木門である（表一）。

見出し語数	門名
221	畜獣
158	禽鳥
138	龍魚
235	蟲介
137	米穀
153	果蓏
186	菜蔬
534	草木

【表一】『和爾雅』の動植物に関わる語を収めた各門の見出し語数

そのため、草木門にみえる漢名と和名の対応を検討対象とする。

三・比較の観点・手法とその結果

『和爾雅』草木門には五三四の漢名が存在する。『新刊多識編』と『本草綱目品目』両書ともに共通する漢名の内、『和爾雅』にも同じ漢名が載るものは二三一例ある。草木門全体の中では約四割の項目でしかないが、この部分で益軒の影響が「和爾雅凡例」に載る書物よりも明確に想定できるとすれば、今後『和爾雅』の成立を考えるうえで益軒の書物の参看は欠かせないことになる。

本稿の目的を達するためには漢名と和名の観察が必要である。しかし、比較対象とした『新刊多識編』、「本草綱目品目」ともに漢名が示されるが、和名は示されない場合がある。両書、もしくはいずれかの書で和名が示されない漢名は三七例存在した。これは三・二・二節で観察する。両書とも和名が示される漢名は一九四例存在した。これらは三・二・三節以降で観察する。条件が異なるためこれらを分けて観察する。次節では各文献での仮名、仮名遣い、濁点、語順の相違を本稿でどのように扱うか述べる。

三・一 各文献における仮名、仮名遣い、濁点、語順の相違の扱い
用いられる仮名や仮名遣い、濁点、和名が現れる順序に比較した各書で相違が見られた。その扱いは次の①から④の通りである。

①和名で用いられる仮名の種類に相違が見られる。『和爾雅』と「本草綱目品目」はカタカナ、『新刊多識編』は真仮名で書かれている。使われる仮名の種類が異なっても、同じ音を表すと考えられる仮名（「サ」と「左」など）が用いられている場合、同じ音とみなした。

②各書で仮名遣いに相違が見られた。本稿では仮名遣いが相違していても同じ音を表すと考えられるもの（「イ」と「ヒ」と「斗」など）は同じ音とみなした。

③濁点の付し方が各書によって違う。清濁が対応するもの（「ケ」と「ゲ」など）は一致するとみなした。

④和名として現れる順序（振り仮名の場合右か左か）については各書で相違するか、一致するかを今回検討していない。

三・二 比較の観点および漢名と和名の対応の比較結果

三・二・一 比較の観点

比較の観点として漢名と和名の対応が『和爾雅』で示されるものと過不足なく一致するかどうかを重視した。本稿では比較した結果を次の分類A〜Cに分けた。

- A 漢名と和名の対応が過不足なく一致するもの。
- B 過不足があるものの、載っている漢名と和名の対応が一

部一致するもの。

C 載っている漢名と和名の対応が全く一致しないもの。

過不足なく一致するとはどのようなものであるか説明する。まず、比較した書物が『和爾雅』に比べ過分に和名を対応させたものを見る。この例として漢名「苦參」を表二に示す。

【表二】漢名「苦參」についての各書の和名

漢名 苦參	『和爾雅』和名 クラ、	『新刊多識編』和名 久良良、末比里久左	「本草綱目品目」和名 クラ、
----------	----------------	------------------------	-------------------

漢名「苦參」の例では和名を『和爾雅』が「クラ、」とするのに対して「本草綱目品目」では過分な和名も不足する和名もない。そのため、「本草綱目品目」は先の分類Aに当たる。『新刊多識編』でも「久良良」としておりこの和名は『和爾雅』での対応と一致するが、さらに「末比里久左」という和名も併せて示している。この点で『新刊多識編』は過分な和名を与えている。そのため、『新刊多識編』は先の分類Bに当たる。次に比較した書物で対応する和名が不足する例を確認する。この例として漢名「著」に付された和名を表三に示す。

【表三】漢名「著」についての各書の和名

漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名	『本草綱目品目』和名
著	メドキ、メンドウ	米 ^ド 主久左、米 ^{トキ} 登岐	メドキ、メンドウ

漢名「著」の例では『和爾雅』で「メドキ、メンドウ」とするのに対して『新刊多識編』では「米登岐」としており、この点で『和爾雅』と一致するが、『和爾雅』で対応する「メンドウ」を和名として示していない。この点で不足があるため『新刊多識編』は先の分類Bに当たる。一方、「本草綱目品目」は過分な和名もなく、不足する和名もないため、分類Aに当たる。漢名と和名の対応について過分と不足を併せて過不足があったとした^{一〇}。

分類Aが多いほど『和爾雅』で見られる漢名と和名の対応の様に近く、『和爾雅』が影響を受けた書物である可能性がある。分類B、分類Cであるものが多いほどその書物から影響を受けたとは考え難い。特にCが多い場合、全く参考にされていないことを示す。また、Bについても影響を受けたことを積極的に主張できるものではない。ただし、分類Bであっても対応する和名が過分

である場合は『和爾雅』の対応を説明できる可能性があるため、この点は確認する必要がある。対応に不足がみられた場合、今回比較した二書以外の影響の存在が確実である。よって、Aに分類されるものが多いか、B、Cに分類されるものが多いかを観察する。まず、比較した両書もしくはいずれか一書で和名が示されないものを観察する。

三・二・二 比較した両書もしくは一書で和名を示さない場合

比較した両書もしくはいずれか一書が和名を示さないものは二一の漢名のうち三七例存在した。『新刊多識編』は和名を示すが、「本草綱目品目」に和名のないものが二四例、「本草綱目品目」では和名を示すが、『新刊多識編』に和名のないものが九例、両書とも和名が示されないものが四例存在した。このうち、両書とも和名が示されない四例は比較した二書以外の利用が明らかである。

『新刊多識編』では和名が示される二十四例の内、分類Aが三例、分類Bが五例、分類Cが一六例あった。分類Bについては一例のみ和名が過分に示されるため『和爾雅』の対応を説明できた

一〇 本稿では過不足なく対応するかを重視したが、各文献で示される和名の数によっては過不足が生じうる。例えば、極端に一書で示される和名が多い場合、その一書では過分であるものが多くなる可能性が高い。そこで比較した各書の和名数を確認する。
 三・二・三節以降で観察する三書とも和名が示された一九四の漢名について『和爾雅』では二八四、『新刊多識編』では二九一、「本草綱目品目」では二五七の和名がそれぞれ示されていた。漢名一つに対応する和名の数が他の書物の倍以上の和名が見られるものはないため、極端に一書で示される和名が多いとはいえず、過不足があるか否かで分析することは問題ないと考える。

が、残りの四例は説明できなかった。また、分類Cの十六例は『新刊多識編』に拠ったことは否定される。分類B、C併せて二〇例は今回比較した二書以外からの影響を考える必要がある。

次に「本草綱目品目」では和名が示される九例の内、分類Aが六例、分類Bが二例、分類Cが一例あった。分類Bで『和爾雅』の対応が説明できるものはなかった。分類Cについても『新刊多識編』では説明できない。分類Aも見られるが、分類B、C併せて三例は今回比較した二書以外からの影響を考える必要がある。

以上から、比較した両書もしくはいずれか一書で和名を示さない三十七例の内、二十七例は今回比較した二書では説明できず、二書以外からの影響を考える必要がある。また、益軒からの影響があった可能性はあるが、明らかに影響があったとは言い難い。次に比較した両書ともに和名が示されるものを観察する。

三・二・三 比較した両書ともに和名が示される場合

両書とも和名が示される漢名は一九四例存在した。表四は比較した二書とも和名が示されるものを分類Aから分類Cに分けたものである。数字は用例数、カッコ内の数字は百分率である。

【表四】『新刊多識編』、「本草綱目品目」における漢名と和名の『和爾雅』との一致数

本草綱目品目	新刊多識編	分類
144(74.2)	50(25.8)	A
40(20.6)	74(38.1)	B
10(5.2)	70(36.1)	C
194(100)	194(100)	合計

表四から次のことが分かる。『新刊多識編』は分類Aが二五・八％である。これに対して「本草綱目品目」では分類Aが七四・二％である。「本草綱目品目」は分類Aが『新刊多識編』と比べて二・八八倍であり、全く様相が異なる。『新刊多識編』では分類Bが三八・一％であり、「本草綱目品目」では二〇・六％である。『新刊多識編』では分類Cが三六・一％である。一方で「本草綱目品目」では五・二％と『新刊多識編』の七分の一であり、かなり少ない。また、分類Bと分類Cの合計は『新刊多識編』で七四・二％、「本草綱目品目」では二五・八％で、「本草綱目品目」のBとCの合計は『新刊多識編』の約三分の一である。

この結果から『新刊多識編』での漢名と和名の対応の様相は「本草綱目品目」に比して『和爾雅』とは遠く、『新刊多識編』を『和爾雅』での漢名と和名の対応の根拠（出典）とするには不十分と

言える。それに対して「本草綱目品目」は『新刊多識編』よりも比較した漢名と和名の対応の多くを説明できることが分かる。

次節では「本草綱目品目」で分類Aから分類Cの時、『新刊多識編』でAからCの各分類に入ったものがどれだけあるかを見る。

特に『新刊多識編』が分類Aであるが、「本草綱目品目」で分類B、分類Cであるようなものが見られるかを確認する。このようなものが多い場合、「本草綱目品目」と一致しない部分では『新刊多識編』の利用を行ったことが示唆される。

また、両書とも分類B、いずれか一書が分類Bであるとき、過大な対応を示していれば、『和爾雅』の対応を説明できる場合がある。これらについても『新刊多識編』、「本草綱目品目」を利用した可能性を否定できない。一方で両書、もしくはいずれか一書が分類Bであっても対応に不足があり、説明できないものが存在する。これらは今回比較した二書だけでは説明できない。両書ともに分類Cである場合についても今回比較した両書だけで説明することはできない。このような対応をするものが見られた場合、『和爾雅』全体では「本草綱目品目」と一致する対応が多いものの全く従うわけではなく、別の書に拠る場合があることを示す。こうした対応を見せるものがどの程度存在するかを明らかにする。

三・三 比較した両書における対応の詳細

表五は「本草綱目品目」での漢名と和名の対応を分類AからCに分けた時、それぞれの対応が『新刊多識編』で分類AからCいずれに当たるかを示したものである。

【表五】「本草綱目品目」、「新刊多識編」両書における対応の様相

合計	新刊多識編			本草綱目品目	
	C	B	A		
144	56	48	40	A	合計
40	10	22	8	B	
10	4	4	2	C	
194	70	74	50		

「本草綱目品目」が分類Aである場合、『新刊多識編』では分類Aであるものが四〇例、分類Bであるものが四八例、分類Cであるものが五六例であった。「本草綱目品目」が分類Aのとき、『新刊多識編』は分類B、もしくは分類Cであるものが多い。両書とも分類Aであるものも一定数あるが、この部分について、どちらから影響を受けたものであるかは不明である。「本草綱目品目」が分類Aである例を表六に示す。

【表六】「本草綱目品目」が分類Aである例

「本草綱目品目」が分類A、『新刊多識編』が分類A(40例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
紫草	ムラサキ	「本草綱目品目」和名
山慈姑	トウロウバナ	ムラサキ
徐長卿	フナワラ	トウロウバナ
「本草綱目品目」が分類A、『新刊多識編』が分類B(48例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
苦參	クラ、	「本草綱目品目」和名
白茅	チガヤ	クラ、
蛇牀	ヘビムシロ、ヤブシラミ	チガヤ
「本草綱目品目」が分類A、『新刊多識編』が分類C(56例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
貫衆	キシノヲ	「本草綱目品目」和名
淫羊藿	イカリクサ	キシノヲ
地榆	ワレモカウ	イカリクサ
「本草綱目品目」が分類A、『新刊多識編』が分類B(48例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
徐長卿	フナワラ	「本草綱目品目」和名
山慈姑	トウロウバナ	フナワラ
紫草	ムラサキ	トウロウバナ
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
苦參	クラ、	「本草綱目品目」和名
白茅	チガヤ	クラ、
蛇牀	ヘビムシロ、ヤブシラミ	チガヤ
「本草綱目品目」が分類A、『新刊多識編』が分類C(56例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
貫衆	キシノヲ	「本草綱目品目」和名
淫羊藿	イカリクサ	キシノヲ
地榆	ワレモカウ	イカリクサ

「本草綱目品目」が分類Bである場合、『新刊多識編』では分類Aであるものが八例、分類Bであるものが二二例、分類Cであるものが十例あった。「本草綱目品目」が分類Bである場合に『新刊多識編』が分類Bもしくは分類Cであるものも少なくはない。しかし、『新刊多識編』が分類Aであるものも見られる。これらは「本草綱目品目」ではなく、『新刊多識編』を参照した可能性がある。「本草綱目品目」が分類Bである例を表七に示す。

【表七】「本草綱目品目」が分類Bである例

「本草綱目品目」が分類B、『新刊多識編』が分類A(8例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
苧麻	カラムシ、ヲ、マヲ	「本草綱目品目」和名
鼠尾草	ミソハギ、ミツカケグサ	マヲ、カラムシ
草薢	トコロ、ヲニトコロ	ミソハギ
「本草綱目品目」が分類B、『新刊多識編』が分類B(22例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
芒	ス、キ	「本草綱目品目」和名
牡丹	ボタン、ハツカクサ、フ	ス、キ、カヤ
菊	キク、カハラヨモギ	フカミクサ
「本草綱目品目」が分類B、『新刊多識編』が分類C(10例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
桔梗	キキヤウ、キチカウ	「本草綱目品目」和名
石蒜	シビトバナ、ステゴノハ	キチカウ
積雪草	ウツボクサ、カキトヲ	シビトバナ、ステゴノハ
「本草綱目品目」が分類Aと異なり、影響関係		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
徐長卿	フナワラ	「本草綱目品目」和名
山慈姑	トウロウバナ	フナワラ
紫草	ムラサキ	トウロウバナ
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
苦參	クラ、	「本草綱目品目」和名
白茅	チガヤ	クラ、
蛇牀	ヘビムシロ、ヤブシラミ	チガヤ
「本草綱目品目」が分類A、『新刊多識編』が分類C(56例)		
漢名	『和爾雅』和名	『新刊多識編』和名
貫衆	キシノヲ	「本草綱目品目」和名
淫羊藿	イカリクサ	キシノヲ
地榆	ワレモカウ	イカリクサ

両書もしくは一書が分類Bの場合、過分な対応を見せるものについては一部の記述を捨象して『和爾雅』が用いたとすれば、『和爾雅』における漢名と和名の対応を説明できる可能性が残される。両書とも分類Bである二二例中七例は両書を合わせることのできるものであった。例えば、表七のうちでは、漢名「芒」は両書ともに分類Bであるが、『和爾雅』の対応が説明可能である。ただし、『新刊多識編』に載る「於波那」、「本草綱目品目」に載る「カヤ」は用いない点で分類Aと異なり、影響関係

は即座に想定できず、それらの和名をなぜ用いないかは検討の必要がある。残る一五例は今回比較した二書に見えない和名があることから二書以外の影響を受けたことが明らかである。『新刊多識編』が分類Cである十例中三例は「本草綱目品目」の記述から説明可能であったが、七例は今回比較した二書以外の影響を受けたことが明らかである。

以上から、「本草綱目品目」が分類Bであるものうち、合わせて二二例については今回比較した両書だけでは説明不能であり、さらに他の書物を用いたことが明らかである。

最後に「本草綱目品目」が分類Cであるとき、『新刊多識編』は分類Aであるものが二例、分類Bであるものが四例、分類Cであるものが四例であった。「本草綱目品目」が分類Cの時に『新刊多識編』が分類A、分類Bであるものが少ないながら見られる。これらは「本草綱目品目」ではなく、『新刊多識編』を参照したとも考えられる。また、今回比較していない書物から影響を受けたとも考えられる。表八は「本草綱目品目」が分類Cである例である。

二 漢名「蜀葵」の和名「アヲヒ」(『和爾雅』)と「アフヒ」(「本草綱目品目」)については相違するとみなした。

【表八】「本草綱目品目」が分類Cである例二

漢名	「和爾雅」和名	「新刊多識編」和名	「本草綱目品目」和名
剪紅紗花	センヲウケ	「新刊多識編」和名	「本草綱目品目」和名
樟	クス	久須	クスノキ
「本草綱目品目」が分類C、『新刊多識編』が分類B(4例)			
漢名	「和爾雅」和名	「新刊多識編」和名	「本草綱目品目」和名
龍膽	リウタン、エヤミクサ	恵也美久佐、利牟多字	リンダウ
葵	アヲヒ	阿於比、古阿於比	コアフヒ
蜀葵	アヲヒ	加良阿於比、阿於比	アフヒ
「本草綱目品目」が分類C、『新刊多識編』が分類C(4例)			
漢名	「和爾雅」和名	「新刊多識編」和名	「本草綱目品目」和名
防風	パウフ	波未於保患	フデハウフウ
烏韭	イハノコケ	伊和乃比計	イハコケ
桑花	クハノハナ	久和乃岐乃世仁古計	クハノコケ

『新刊多識編』が分類Bであるものうち過分な対応をするものについては、一部の記述を捨象して用いたとすれば、『和爾雅』における漢名と和名の対応を説明できる可能性が残される。表八に示した漢名「葵」、「蜀葵」の二例は『和爾雅』の対応を説明できる。『新刊多識編』が分類Bであるものの内の二例は『和爾雅』の対応を説明できない。また、両書とも分類Cである四例についても説明できない。よって、「本草綱目品目」が分類Cである十例中六例は今回比較した両書だけでは説明できないことになる。

以上から「本草綱目品目」が分類Bであるもののうち二二例、分類Cであるもののうち六例については今回比較した二書以外の利用が確実である。合わせて二八例は「和爾雅凡例」第十四条に載る書物の内、今回用いなかったものに『和爾雅』と同様の漢名と和名の対応が確認されるか検討する必要がある。

以上、『新刊多識編』、「本草綱目品目」に和名が示される漢名について『和爾雅』草木門のものと比較した。その結果、以下の六点が分かった。

①『和爾雅』草木門、『新刊多識編』、「本草綱目品目」三書に共通する漢名は二三一例ある。これは『和爾雅』草木門全体の約四割である。このうち『新刊多識編』、「本草綱目品目」両書もしくは一書に和名が載らないものは三七例あった。

②『和爾雅』草木門、『新刊多識編』、「本草綱目品目」の三書に載る和名が示される漢名一九四例を検討した。その結果、『新刊多識編』では分類Aが二五・八%であるのに対して「本草綱目品目」では七四・二%であった。また、『新刊多識編』では分類Cが三六・一%であるが、「本草綱目品目」では五・二%であった。このことは『新刊多識編』よりも「本草綱目品目」が『和爾雅』に与えた影響が大きかったことを示す。

③『新刊多識編』、「本草綱目品目」両書とも全く一致するものが四〇例見られる。この部分に関してはいずれの書を参考に

したかは不明である。

④「本草綱目品目」が分類Aの時、『新刊多識編』で分類Bのもの、分類Cのものは合わせて一〇四例存在し、今回比較した一九四例の過半数を超えている。特に『新刊多識編』の影響が考えられない分類Cについては五六例ある。

⑤その一方、『新刊多識編』は分類Aであり、「本草綱目品目」が分類Cであるという用例も二例存在した。用例も少なく、現状ではこれらがなぜ「本草綱目品目」と一致しないか、どの書物からの影響があったかは不明である。

⑥今回対象とした範囲だけでも二八例は比較した『新刊多識編』、「本草綱目品目」両書では説明がつかない漢名と和名の対応を見せていた。「和爾雅凡例」に載る書物の内、今回用いなかった『和名類聚抄』、『訓蒙図彙』など、漢名に和名を対応させる書物を中心に書物との比較・検討を要する。

以上より、『和爾雅』草木門の今回検討した範囲については『新刊多識編』よりも「本草綱目品目」の影響が大きいことが分かった。「本草綱目品目」は「和爾雅凡例」に見えない書物であるが、『和爾雅』の編纂に際して用いられた可能性がある。このことは好古の著作に益軒が影響を与えたことを示す。また、「和爾雅凡例」には『多識編』の名が挙がるが、『新刊多識編』を用いた今回の比較結果から、『和爾雅』の漢名と和名の対応については『新刊多識

編』が与えた影響は小さいと考えられる。

四. まとめと今後の課題

最後にここまで述べたところをまとめ、今後の課題を示す。

本稿では元禄期に貝原好古によって編まれた意義分類体辞書『和爾雅』がどのような書物を参考にしとみられるかを、漢名と和名の対応という観点から調査した。『和爾雅』はこれまでほとんど検討されていなかったが、この調査により『和爾雅』成立の一端を把握することを目的とした。具体的には、『和爾雅』草木門の漢名に付された和名が林羅山『新刊多識編』、貝原益軒「本草綱目品目」のどちらに載るものと近いかを検討した。検討の範囲は漢名が「本草綱目品目」と『新刊多識編』、『和爾雅』の三書のいずれにも載るものとした。そのため、今回比較した語は草木門の一部であるが、この範囲で一定の傾向が見出せるか検討した。比較した両書もしくは一書で和名が示されないものと両書ともに和名が示されるものは分けて観察した。

その結果、比較した両書もしくは一書で和名が示されないものについては明瞭な傾向を見出せなかった。両書ともに和名が示されるものについては以下のことが判明した。『和爾雅』に見える漢名と和名の対応と一致するものを示す割合は『新刊多識編』よりも「本草綱目品目」の方が多かった。「本草綱目品目」には漢名と

和名の対応が分類Aであるものは約七割あり、分類Cであるものは極めて少なかった。このことは漢名と和名との対応の仕方について「本草綱目品目」の利用があつた可能性を示す。『近世畸人伝』や『益軒全集』で述べられていた益軒から好古への影響という言葉を裏付ける一つの事実といえよう。一方で「本草綱目品目」が分類Cであるものが十例ある。この内、『新刊多識編』が分類Aであるものは二例、分類Bは四例見られた。これらは益軒の書物ではなく、他の書物に従うものである。現状ではこれらがなぜ「本草綱目品目」と相違するかは不明である。

また、「和爾雅凡例」に「本草綱目品目」の名は挙がらない。笹原(二〇〇七)、野口(二〇二〇)の指摘を併せて考えれば、複数の益軒の書物が「和爾雅凡例」に名が挙がらないものの『和爾雅』を編む中で用いられた可能性があることを示唆する。この点を考慮していきたい。今後の課題は以下の四点である。

- ・今回、検討を行った範囲は草木門の一部である。検討できなかった語、今回比較した二書では説明が不能である語については別の資料を用いて考察する必要がある。

- ・草木門以外の門において、『和爾雅』における益軒からの影響がどのような箇所及んでおり、どの程度の大きさかを考えるためには他の動植物に関わる門についても今回と同様の傾向が見

られるかを検討する必要がある。

・草木門の漢名と和名の対応については「本草綱目品目」に見られるものと多く一致する。しかし、「本草綱目品目」は『本草綱目』の見出し語を順に並べて振り仮名の形で和名を付したのみの書物であり、『和爾雅』で注文となりうる記述がないため、注文についての影響は考えられない。『和爾雅』が注文について何を典拠としたのかは別途検討する必要がある。

・益軒からの影響関係は確かめられたものの完全に一致するという様相ではないことが分かった。今後益軒の知識をどのように用いたか、検討する必要がある。

以上の四点を今後の検討課題とする。これらの点を観察することで、この期の辞書における漢名と和名の対応についてどのように選択がなされたのかを考察するとともに、『和爾雅』の成立事情を考える手掛かりとしたい。

【参考文献】

一．使用テキスト

『和爾雅』…早稲田大学蔵元禄七年刊『和爾雅』（請求番号…ホ0

2 04852)：「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> で閲覧した。(二〇二一年九月二三日最終閲覧)

『本草綱目』…京都大学附属図書館富士川文庫所蔵 寛文十二年刊『(重刊) 本草綱目 52巻 (序目・図・巻1―52)』

(請求番号…ホ/43)：「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」<https://mda.kulib.kyoto-u.ac.jp/> で閲覧した。(二〇二一年九月二三日最終閲覧)

『新刊多識編』…中田祝夫・小林祥二郎(一九七七 a)『多識編自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引 影印篇』勉誠社

二．辞書記述、論文 等

磯野直秀(二〇〇八)：「日本博物学史覚え書XIV」『慶應義塾

大学日吉紀要 自然科学』四四 九九―一二四ページ、慶應義

塾大学日吉紀要刊行委員会

井上忠(一九八三 a)「貝原好古」日本古典文学大辞典編集委員

会編(一九八三)『日本古典文学大辞典 第一巻』岩波書店

井上忠(一九八三 b)「貝原益軒」日本古典文学大辞典編集委員

会編(一九八三)『日本古典文学大辞典 第一巻』岩波書店

井原孝一(一九五八)「益軒号私攷」『香椎鴻』四 二六―三二頁

―ジ、福岡女子大学

岩波書店 編(一九七二)『国書総目録 第八巻』岩波書店

- 益軒会編（一九一、後一九七三）『益軒全集 全八巻之六』国書刊行会 益軒全集刊行部（一九一一）の複製
- 笹原宏之（二〇〇七）「第一部第一章 国字の定義と分類」『国字の位相と展開』三二―八七ページ、三省堂
- 中田祝夫・小林祥二郎（一九七七b）『多識編自筆稿本刊本三種 研究並びに総合索引 索引篇』勉誠社
- 野口隆（二〇二〇）「延宝版『倭漢名数』および『増補和漢名数』について」『国語国文』第八九巻一号 一―一八ページ、臨川書店
- 蜂谷清人（二〇〇七）「和爾雅」飛田良文（編者主幹）他『日本語研究事典』明治書院
- 伴蒿蹊著、宗政五十緒校注（一九七二）『近世畸人伝』平凡社
- 堀勇雄（一九八四）「林羅山」日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第五巻』岩波書店
- 米田達郎（二〇一四）「和爾雅」佐藤武義、前田富祺編『日本語大事典 下』朝倉書店
- 渡邊幸三（一九五三）「李時珍の本草綱目とその版本」『東洋史研究』一二巻四号 三三三―三五七ページ、東洋史研究会

〔付記〕本稿は名古屋大学国語国文学会令和二年度大会で発表した原稿を基に加筆、修正を行ったものである。発表の際に頂いたご質問、ご意見に対し紙上を借りて感謝申し上げます。

Abstract

About Japanese names corresponding to Chinese names in Kaibara Yoshifuru "Somokumon" of *Wajiga* -focusing on the influence from Kaibara Ekiken

KITO, Yuta

Wajiga is a meaning classification dictionary written by Kaibara Yoshifuru and published in the 7th year of Genroku. It has been said that Kaibara Yoshifuru wrote under the influence of his uncle Kaibara Ekiken. In this paper, I compared whether the correspondence between Chinese name and Japanese names matches that of the preceding Ekiken's books. Furthermore, I compared the correspondence between Chinese names and Japanese names in Hayashi Razan's *Shinkan-Tashikihen*, which is said to show a different correspondence from the correspondence between Chinese names and Japanese names in Ekiken's books. Yoshifuru says that he used *Tashikihen* in the compilation of *Wajiga*. On the other hand, it is not clearly said that Ekiken's books were used. It has already been pointed out that many of the correspondence between Chinese and Japanese names in *Shinkan-Tashikihen* and *Honzokomokuhinmoku* is different. Based on this result, it was verified whether the correspondence between the Chinese name and the Japanese name in the "Somokumon" of *Wajiga* is similar to that in the books of Ekiken. As a result, the following was found regarding the correspondence between Chinese names and Japanese names in *Wajiga*.

- I There are many items that completely match the correspondence between the Chinese name and the Japanese name in the *Honzokomokuhinmoku*, and there are few items that do not match.
- II On the other hand, there are few that completely match the correspondence between the Chinese name and the Japanese name in *Shinkan-Tashikihen*, and there are few matches.

As a result, the correspondence between the Chinese name and the Japanese name in the "Somokumon" of *Wajiga* seems to be close to the *Honzokomokuhinmoku*. It shows the possibility that Ekiken had an influence on Yoshifuru, and at the same time, it is an important clue when considering the establishment of *Wajiga*. The remaining problem is only the "Somokumon" was examined this time, and it is unclear whether the influence of Ekiken on the entire *Wajiga*. In addition, it is not possible to understand all the descriptions of *Wajiga* from *Honzokomokuhinmoku* alone. Regarding these two points, it is necessary to consider the influence from other books.